



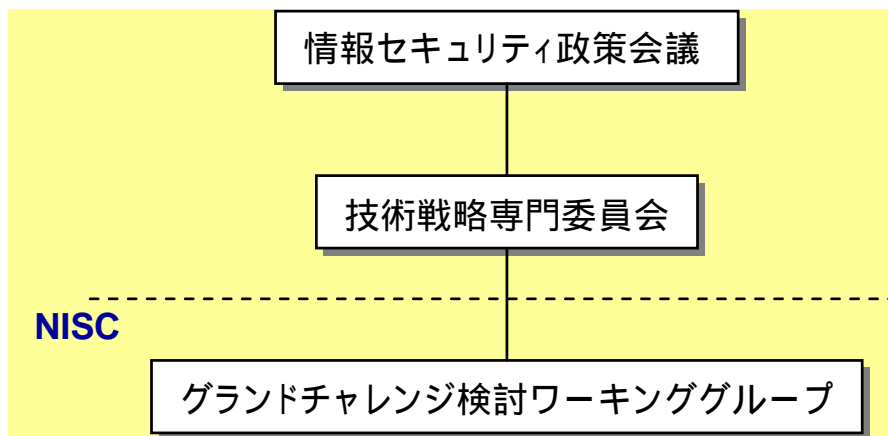
グランドチャレンジ型研究開発の検討方針(案)

2008年7月

内閣官房情報セキュリティセンター (NISC)

<http://www.nisc.go.jp/>

平成19年度には、3回の検討を実施



WG	議題
第1回	・我が国政府における研究開発の動向 ・WGにおける議論の方向性について
第2回	・グランドチャレンジに関する検討
第3回	・WG中間報告書について ・グランドチャレンジテーマについて

【H19度グランドチャレンジ検討WG委員】

(座長)

武田 圭史 カーネギーメロン大学日本校 教授

(構成員)

新井 悠 株式会社ラックサイバースペース研究所 先端技術開発部長

大岩 寛 産業技術総合研究所情報セキュリティ研究センター 研究員

門林 雄基 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所 准教授

鎌田 敬介 JPCERT/Coordination Center 早期警戒グループマネージャー

小池 英樹 電気通信大学 大学院情報システム学研究科 教授

寺田 真敏 株式会社日立製作所Hitachi Incident Response Team (HIRT)

野川 裕記 株式会社セキュアウェア 取締役

福本 佳成 楽天株式会社システムセキュリティ部 部長

星澤 裕二 株式会社セキュアブレイン 執行役員

吉岡 克成 横浜国立大学 学際プロジェクト研究センター 助教

WG第2回開催後のWG中間報告を第9回技術戦略専門委員会に報告 各委員からの主な意見は以下の通り

- ・脅威はそれほど大きくないという立場は、脅威に対する受動的な対応を前提としており、積極的な対応を考えたときには適切ではなく、様々な対応が必要。
- ・一部分を捉えて脅威が減少している様に見える統計もあるが、全体として減少していると断言できるものではない。
- ・攻撃側の立場と防御側とのバランスを取った開発が必要。
- ・一旦大きな絵を描いて、グランドチャレンジのターゲットを議論する必要がある。
- ・グランドチャレンジテーマ設計の方法論として、以下のような例がある
 - ゴールFIX型(例: ウィルスに感染したPCを10年後にゼロにする)
 - 将来出てくる脅威を狙い撃ちする取組み(例: 情報家電、携帯ゲーム機向けウイルス)
 - アプリケーションと一体で、事前にセキュリティの尺度や基準を明確化しての開発(例: 新しいサービスや製品の利活用のアイデアとリンクした上で、何時までに情報セキュリティの機能を、どのレベルまで実現するかを先に決めて開発を行なう)

H20年度におけるグランドチャレンジWGにおける議論の方向性(案)

1 テーマ設計の方法論と具体的ターゲット

前述の、或いは他のどのような方法論のもとで、具体的にどんなテーマをターゲットにするか？

例：・社会や技術の変化に応じて、リスクの変化にも対応していけるセキュリティ

・積極的セキュリティ：「ここまでやれば、このレベルのセキュリティが実現できるので、こんなサービスや製品が提供できる」という風に、セキュリティ技術を上手く攻めの道具に使う

・広義のセキュリティへの再構築：情報セキュリティに限らず、広く社会やシステムの信頼性 (Dependability & Reliability) の概念を取り込み、シナジーを狙ったセキュリティを目指す

2 グランドチャレンジのアウト・カムの様態

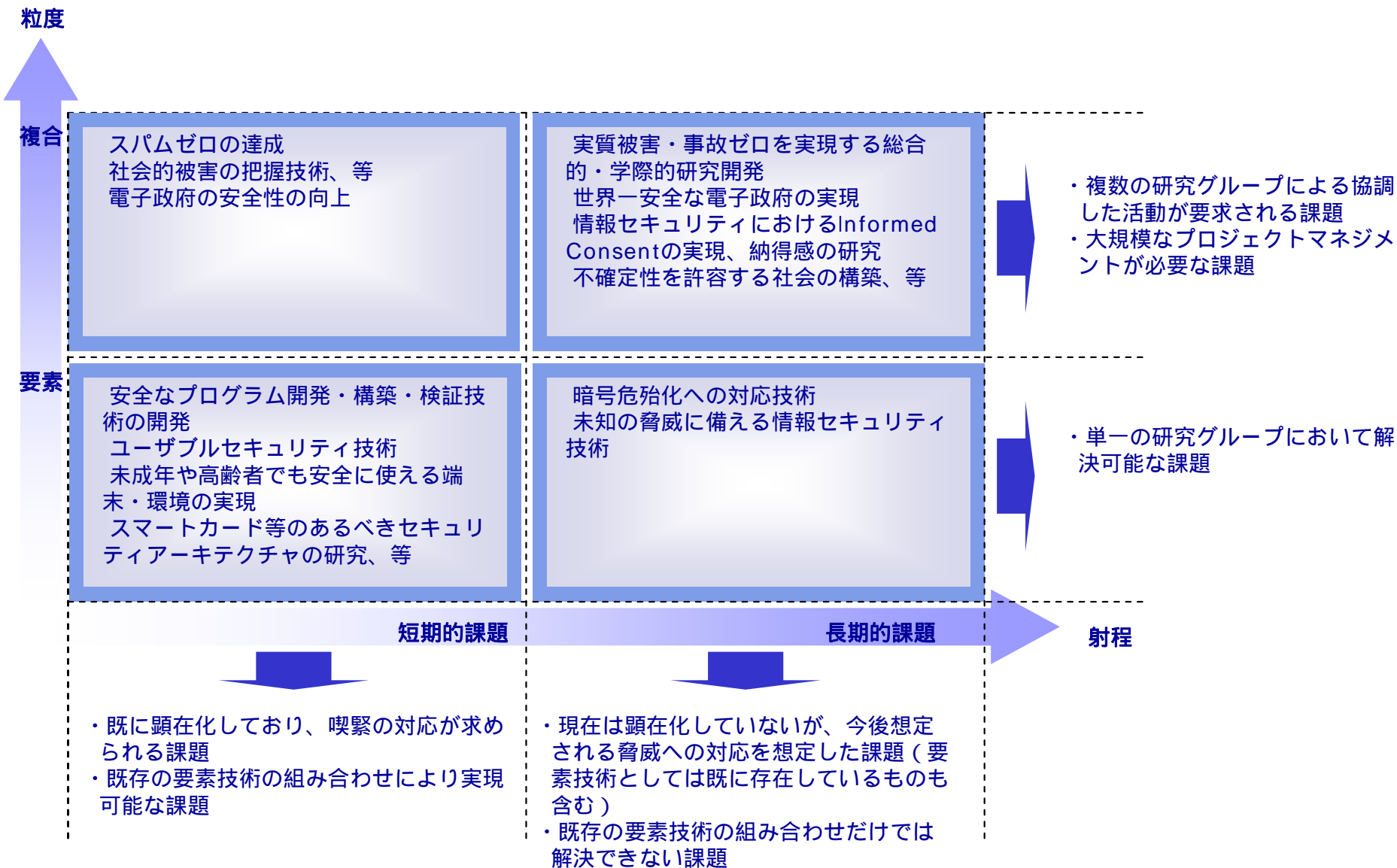
アウト・カム(チャレンジの結果、実現する社会や状況)として、どのようなイメージを設定するか？

3 議論を行うテーマの粒度・射程

次ページの図における、どのエリアに注力するか？

4 その他

グランドチャレンジ型研究開発のテーマ(案)



技術戦略専門委員会の下にWGを設置して報告書の具体的検討を行う

1 構成員の専門分野構成

- ・ アカデミック (情報工学)
- ・ S Iベンダ
- ・ セキュリティサービス・ベンダ
- ・ 公的研究機関
- ・ セキュリティ関係NPO
- ・ セキュリティプロダクト・ベンダ
- ・ オンライン・ショッピングモール

2 関係団体からの意見募集

(1)対象団体

- ・ 情報システム・ユーザ団体
例) ISP、ITベンダー、ソフトウェア
- ・ 情報通信業界
- ・ 学会
- ・ 公的研究機関
- ・ 金融業界 (銀行、証券、保険等) 団体
- ・ 運輸団体
- ・ 物流団体

(2)意見聴取方法

- 1 アンケートによる
- 2 個別ヒアリング

今後の技術戦略専門委員会とグランドチャレンジWGの スケジュール(案)

